

## 中野先生との”論争”をふりかえって

新崎, 盛暉 / ARASAKI, Moriteru

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

293

(終了ページ / End Page)

303

(発行年 / Year)

1986-03-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002700>

## 中野先生との“論争”をふりかえって

新崎盛暉

『新沖繩文学』（第六十四号、追悼特集Ⅱ中野好夫と沖繩）の中で、金城睦氏は、「復帰の評価については、有名は新崎盛暉さんと中野先生の論争というか師弟間の意見の対立というのがある」という。どうやらぼくと中野先生の「論争」も、有名な論争として社会的認知を受けはじめたらしい。金城氏はつぎのように続ける。

「どちらも早い時期にはいわば復帰を推進する勢力の一員としてありながら、具体的な、七二年に実現した、施政権返還という形の復帰に対する評価については見解が違った。屋良さんと中野先生は近い感じであつたりこんな苦しい目にあいながらここまでできたんだから、たとえどんな不十分なものであつても釘一本たりとも役立つのは拾えという精神で、この復帰は実現させるべきであるというのが基本的な考え方ですね。それに対して新崎さんは、この復帰によってむしろ基地や安保体制が強化され、またいままで培ってきた沖繩の力というのが分散破壊されてかえってマイナスになる、だからこの復帰は否定すべきであるという意見でした。一方折角ここまで来たのに、もしここでこの復帰というの

に反対したら元のもくあみでいつまでも苦しい米軍支配が続き、もう帰れなくなるんじゃないかという不安があり、中野先生の考えの根底にそれがあった。ところが、ここまで来た以上、反対したって取れる物は取れるんだ、決して元のもくあみではないというのが新崎さんたちの見方で、復帰後の具体的な状況をふまえるなかで後では中野先生も新崎さんの方が正しかったかなあという感じのことを言っておられる。」

第三者から見た、中野・新崎論争のなかみである。当事者としては、多少修正したい点もないではないが、双方の見解がほぼ正確に表現されているといっているだろう。

ところで、この論争は、決して公開の場で行われたわけではない。二・四ゼネストの挫折（一九六九年二月）から第二次佐藤・ニクソン会談（同年十一月）の間に、先生のお宅の応接間で二、三度、当時三十三歳のぼくが、当時六十六歳の先生に挑戦し、「理屈はそうかも知らんが君……」と笑いと共に軽くあしらわれてしまったというのが実情である。

その直後（一九七〇年八月）、ぼくと先生は共著で『沖繩・七〇年前後』（岩波新書）を出す。この本は、前著『沖繩問題二十年』（岩波新書、一九六五年六月）の続篇ともいえるべきものだが、ぼくは前著同様、原稿の段階で先生に目を通していただくことを希望した。先生との論争が念頭にあったからである。

もとよりこの本は、特定の政治的見解を表明しようというものではない。事実関係の推移とその問題点を、できるだけ資料をして語らせようとするものであったが、当然そこには、資料を語らせる著者の姿勢が反映せざるをえない。一九六五年から七〇年という激動期の沖繩問題を整理しようとする場合、どうしても意見の食い違いを調整しておく必要があると思われるのである。

ところが先生はいとも簡単に、「ゲラでいいよ」といわれた。そしてゲラを見て、文章表現のうえでは、いくつか手直しをされたが、内容については、ただの一つも異論をさしはさまれなかった。

大幅な内容修正を予想していたばかりにとつて、それは意外なことであった。先生にとつて、こんなことは問題にならないことなのだろうか。ぼくは疑問に思った。

だが、後になってだんだんわかってきたことなのだが、先生とぼくの見解の食い違いは、同一次元のそれではなく、次元の異なるものだったのである。いわば、社会科学の現状分析ないしは戦略論と人間の志を重視する人間主義的現実主義のすれ違いだったのである。

その点が、たとえば、ぼくと新里恵二氏たちとの見解の食い違いと似て非なる点であった。

新里氏は、第二次佐藤・ジョンソン会談（一九六七年十一月）の後で、なおつぎのように主張している。

「沖繩現地の闘争も日本本土の闘争も、これからどんどん前進していくに違いない。日米共同声明が出たために沖繩現地の闘争が足をすくわれるという可能性はいまの所ほとんどのない。むしろ強化されるだろう。ますます彼らの支配は不安定になってくるし、なんらかの新しい方針が必要となってくる

だろうことも事実です。その時にとる方針として、とにかく施政権だけでも返そう、その代わり代償として日本本土ぐるみ侵略態勢を再編強化しようという方向にいくか、それともベトナムのように沖繩現地で徹底的弾圧体制をとってどんなことがあっても決してここを手放さないといつてしがつくか。ぼくは、沖繩をふくむ日本の革新勢力は、アメリカが代償として求める侵略態勢の再編強化を許さないだろうという見通しに立つから、しがみつくと蓋然性のほうが大きいと考える。それほど沖繩に対してアメリカ帝国主義がふりあてている軍事的役割は大きいのだ」(木下順二ほか「シンポジウム沖繩」、三省堂新書、一九七八年四月)。

ここには明確に、現状分析ないしは戦略的展望における認識の不一致、つまり同一次元における見解の食い違いがある。このような場合には、激動する六〇年代後半の沖繩問題の推移を整理する共同作業など成立しうはずがない。ところが先生にとっては、薄っぺらな社会科学の現状分析など、ある意味でどちらでもよかったのである。その意味では、自分の現状分析を、科学的であると思ひ込んでそれにこだわざるをえないぼくたちのほうが現実主義であり、そのようなものを超えたところで、先生自身の言葉でいえば道義的責任論、木下順二氏の言葉を借りれば原罪意識に基づいて、自らの判断基準、行動準則を設定される先生のほうが理想主義的だったのかもしれない。それは、「イデオロギーよりも、むしろ人間そのものを重視する」先生の生き方もみごとに符合する。お互いに、沖繩問題に人間として真剣に取り組んで来たのだということが確認されるならば、そして復帰によって決し

て沖繩問題は終わらないという共通認識が成立するならば、現状分析のうえで見解の相違など、先生にとってはたいした問題ではないのである。自分自身の見解に固執するぼくの態度に苦笑しながらも、「沖繩、七〇年前後」の共著者として名まえを並べることに、先生はほとんど何の違和感もなかったのだろうとぼくは思う。

ぼくたちが、佐藤・ニクソン共同声明に、それみたことかと無念の歯ぎしりをしているとき、中野先生は、お茶の水の駿台荘に立てこもり、日米共同声明の欺瞞性を実証的に指摘したパンフレット「日米共同声明に関する内外解釈の重大な食い違いについて」をまとめて、これに十円か二十円の定価をつけて配布されたのである。その内容は、「マスコミ市民」(一九七〇年二月号)や「世界」(一九七〇年三・四月号)でも知ることができるが、先生はそれを依頼原稿として書かれたのではなく、いわば自費出版されたのである。そういうかたちで、人間主義的現実主義者としての責務を果されたのである。ぼくたちはといえば、「もうそんな時代じゃないんだよなあ」とぼやきながら、資料集めやパンフレットの配布を手伝っていたというわけである。

しかし、先生は、決してぼくとの「論争」を忘れていたわけではなかった。先生のお宅での「論争」から六、七年もたったころ、突如先生はこの「論争」をおおやけの場に持ち出された。もっとも、それを誘発したのは、ぼくのほうかもしれない。先生のこの発言は、ぼくの「戦後沖繩史」(日本評論社)の書評のなかでなされたからである。

『戦後沖縄史』は、沖縄タイムス紙上に二〇六回にわたって連載した「試論・沖縄戦後史」を三分の二ほどに圧縮したもので、ぼくのとりあえずの沖縄戦後史総括、復帰運動総括であった。当然、二・四ゼネストから佐藤訪米阻止闘争の過程が重視されざるをえない。そこにはぼくの問題意識がいわばむき出しのかたちで表出されていた。であってみれば、先生が数年前の「論争」―この本の中ではそれにひとことも触れていないのだが―を思い起こされても不思議ではない。

先生は、『社会新報』（一九七六年六月二日付）の、書評としてはかなり長い文章の中でつぎのように言われる。

「さて、この佐藤訪米阻止については、わたしには苦しい記憶がある。終始いっしょに仕事をしていた新崎君と、実はこのとき、はじめて意見の相違が出た。新崎君ははっきり阻止をいったが、わたしは反対とはいったが阻止とはいえなかったのだ。いずれロクな協定ができるとはもちろん、期待しなかったが、それにしてもアメリカ支配だけは断つべきだ、あとは本土政府の態度しだい、漸進の途はあると、いまから思えば実にあまいわたしの考えだった。取れるのはなんでも取っておけ、落ちた針一本でも拾っておけとまで言ったように思う。が、新崎君は納得しなかった。あくまで阻止といった。お互い子どもではないから、別にけんか別れまでにはならなかったが、やはり彼が正しかったのである。まさに拾った針を本土政府が、沖縄の脳深く打ちこむようなひどいことまではすまい、と考えたのがあまかったのか。とにかく、いまもって悔いがのこる。

もちろん、新崎君の所論にも多少の疑問はある。それならばあの場合、どうすれば阻止に成功できたか、また阻止に成功すれば現在どうなっていたか、そこまでもっと具体的に新崎君は書いてほしかったと思うが、結論からいえばどうやら、やはり彼の方が正しく、わたしの考えがあまかったように自責する。（文中の「針」は、先生のふだんの話からすれば、多分「釘」の誤植だと思う）

その後も先生は、たびたびこの「論争」を引き合いに出す。たとえば、一九七九年六月の日本平和学会年次大会後の特別講演やそれに補筆した「小国主義の系譜」（『新沖縄文学』第四十四号、一九八〇年三月）、さらには、「沖縄問題への社会的発言は一切やめる」と宣言した復帰十周年目の共同通信社の配信原稿（一九八二年五月）などがそうである。

しかし、そこで先生は、自分の考え方の甘さは指摘されているが、誤まりを認めているわけではない。なるほど、「結果は完全な私の見当違い。完全に私の負でした」（『新沖縄文学』第四十四号）といった表現もあるが、それは先生独特の言いまわしであって、実は、先生は決して自分の判断の正しさを否定してはいないのである。

先生は、一九八二年五月十四日に開かれた日本弁護士連合会主催の沖縄復帰十周年記念集会での講演でつぎのように発言されている。

「私は先程述べた活動を行っていた（パンフレットの自費出版、自費配布）のである。そこで粉砕・阻止するかどうかについては非常に迷ったのだった。そこで一応不完全ながら施政権は返しておいてもらっ

た方がよいと思つたのであり、また現在もその考え方に変わりはない。」

『週刊法律新聞』（一九八二年五月二十二日）に掲載された講演要旨からの引用であるから、表現はかならずしも正確ではないかもしれないが、先生の言いたいことは伝えられていると思う。

またつぎのようにも言う。

「私に反対する新崎さんの主張は、サンフランシスコ講和の時には、私達は全面講話を主張し、それが通らないのなら多少の遅れは構わないと言っていた。それが沖繩の時はなぜ遅れるのを承知で粉碎・阻止の方に立たなかったか、というのである。確かに図式的には新崎さんの言う通りで、もしアメリカが基地抜き沖繩を返してくれるようになっていたなら私の考えは百パーセント間違っていたと言うしかない。

現在沖繩には、つい隣りの県に行くように観光旅行に多勢詰めかけている。これがもし現在もアメリカの施政権下にあるとすれば、そんな事はできないだろう。私の考えもあながち誤りではない。」

（前掲『週刊法律新聞』）

これは、先生の講演の直前に発行された『法律時報増刊、復帰10年の沖繩白書』（日本弁護士連合会編、一九八二年四月）に収録されている多くの発言への反論を含んでいる。ぼくも頑固だが、先生も頑固なのである。しかし、この「論争」は、次元の異なる立脚点に立っているのであるから、あの世まで持ち越しても、多分、かみ合うことはないであろう。

いずれにせよ、先生は、自分の判断が間違っていると思つていたわけではない。むしろ正しかったと思つていた。また、判断の甘さをしきりに口にされるけれども、先生が復帰前に書かれたものを読めば、先生がそれほど日本政府を甘くみていたのではないこともわかる。

では、先生が、ぼくとの「論争」にかこつけて言いたかったことは何か。そこに表現されているのは、復帰後の沖繩の状況に対するいらだちである。

現実主義者としての先生にとつて、復帰であれ、独立であれ、それは人間解放のたんなる手段である。その点ぼくもまったく同じ認識をもつ。先生にとつて、復帰も、独立も、いかなる意味においても、それ自体が目的となりうるようなものではない。

落ちている釘を拾うような程度の復帰であつてみれば、しかもその釘を拾うことには、先生が自費出版のパンフレットで警鐘を鳴らさなければならぬような危険性がまわりついているのであつてみれば、復帰はいかなる意味においても、一つの到達点ではありえない。緊張に満ちたさらなる闘いへの出発点—むしろ通過点というべきか—であるに過ぎない。にもかかわらず、沖繩の変わりようはどうしたことだ。先生は、本土資本や日本政府の政策を批判しながら、その裏、そうした政策に対する沖繩側の対応を批判していたのである。とりわけ海洋博のころから、つまり「戦後沖繩史」の書評を書かれたころから、先生のいらだちはますますつよくなっていく。

この点、社会学者のつもりでいるぼくたちのほうが、事態の受けとめ方はむしろクールだったの

かもしれない。それは、二・四ゼネストを貫徹しえなかった復帰運動の思想性、二・四ゼネストを回避に誘導した日本労働運動の体質、復帰後の日本政府の政策による社会構造の変化がもたらした必然的帰結だったのだから。

しかし、ナマクラ科学やイデオロギーなどは、ある意味でどうでもよい先生にとってみれば、周辺状況のいかなる変化のなかでも、人の初心は貫かれなければならないのであったのである。

すでに「小国主義の系譜」の中で先生はつぎのように言っていた。

「一昨年てぢぢもついに保守党知事を選択しました。県民みなさまの多数意志とあれば、私などヤマトンチウの口を挟む余地はないのかもしれませんが、まことに懽然たる感慨であることだけは事実です。本土直結という美名での今後の沖縄政策が、果してどんなことになるのか、刮目して見ていたい。」

そしてつぎのように言う。

「そこできよいよ最後に、これは蚊の鳴くような小さな声で申上げるのですが、もう沖縄のみならず方もそろそろ本土にサジを投げる、愛想づかしをする日が来ているのではないか、いや、少なくとも近い将来にくるのではないかということですよ。」

この発言は、文字通り沖縄問題に関する最後の発言となった一九八四年三月十三日付沖縄タイムスのつぎの発言へと発展する。

「率直に申しますが、私は復帰以来の沖縄県民の動向に対し、かなりの疑問を感じています。復帰運

動時代のあのたくましい反中央的活力は、どこへ行ってしまったのでしょうか。末端は各自治体から大は県を通じ、近年著しい中央志向の体制寄りには、いったいどういうことなのでしょう。」

三十年以上の長い間、直接的に、誠実に沖縄問題とつきあった現実主義者中野好夫は、この言葉を残してあの世へ旅立ってしまった。先生の死後、残された者たちの間で、あれやこれやの中野論がかまびすしい。前掲「新沖縄文学」第六十四号もその一つである。だが、編集者の手になる巻頭言「石鼓」をはじめ、中野現実主義批判のなんと皮相なことか。これを自分たちの足許を照らす光として内在的に理解しようと努めているのは、いれい・たかし（「小国寡民の思想」について）ぐらいか。先生の生き方からすれば、どのみちそれは、ぼくたち自身の問題であって、もはや先生とは関係のないことなのである。